みる つくる かたる

千葉県立美術館報
VOL. 12 NO.2
（通巻46号）
昭和60年7月15日発行
編集・発行人　平野　馨

〒260
千葉市中央港1丁目10番1号
☎0472－42－8311（代表）

ジョルジュ・ルオー

「サーカスの少女」

油彩・キャンバス　一九三八―九年

（フランス名画展出品・西宮市大谷記念美術館蔵）

ルオー（一八七一―一九五八）のモチーフには、キリスト、道化師、娼婦、貧民街とそこに住む人々などがしばしば登場します。この作品もそのような中の一点であり、これらのモチーフを通して、人間の内奥をとらえようとしました。画面にはいつも宗教的な響きと高い厳粛な精神性がにじみ出ています。モローの門下であった修業時代以後、その造形探求は全く独自の研究によってなされ、マチエールの探求にも非常な努力を示しました。エナメルを塗ったような重厚なマチエールと濃密な色彩はルオー独特のものであり、深い精神性を漂わせる効果をもたらしています。力強い黒い線、純粋な赤、緑、黄を中心にした色彩がルオーの画風に顕著であります。あくまでも人間性そのものの追求と人間愛の精神を貫いたルオーは、二十世紀の画家でありながら、同時代の絵画の動きに対してはほとんど無関心であり、自らの画境の探求を続けました。二十世紀唯一最大の宗教画家とも称されるルオーの作品は、時代を超越して見る者の心に深い共感を呼び起こします。

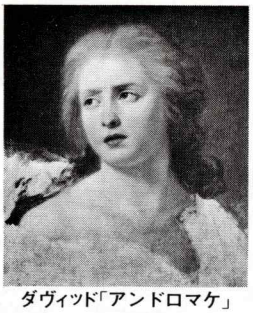
みる（展覧会）

特別展 フランス名画展

―ロココからエコール・ド・パリまで―

十八世紀から二十世紀前半の代表的画家の作品を展観

'85・8・23(金)～9・16(月)


ダヴィッド「アンドロマケ」

ドガ「踊り子」

マチス「鏡の前の青いドレス」

本展は、フランスの十八世紀から二十世紀前半までの絵画の流れをロココからエコール・ド・パリまでに亘り、傾向別にとらえ、近代絵画の流れが理解できるように展示します。以下、本展の内容に沿って絵画の流れを概観してみたいと思います。

ロココ

十八世紀に入ると、文化のにない手は、宮廷から貴族や裕福な市民階級へと移り、繊細で典雅な趣の美の表現がなされました。色彩は明るくなり、やわらかい色調のパステル画もこの時代にその真価を発揮しています。ワトーはこの時期の代表的な画家の一人です。貴族や富豪達の愛の園遊などを夢幻的に詩化して描く「雅宴画」を創始しました。また同時期の画家として、ブーシェ、フラゴナールの存在も忘れることはできません。

古典派

フランス革命前後から新たな美術様式が隆盛をきわめました。それは、ギリシャ・ローマの古典作品を模範とし、華麗な装飾美を排して卒直、明快な構成による表現を求めた古典主義です。この思潮は、ヴィンケルマンの古代研究から強い影響を与えられ、古代の美術が美を最高の方法で実現させたものであると唱え、万人にとっての共通の美となりえたのです。これはナポレオンの台頭によって当代の美術の主流となりました。その代表的な画家としてダヴィッド、アングル等が位置しています。いずれも、単純、明晰な古典美の志向に支えられた作品を生み、また発展させました。

ロマン派

前述の古典主義と二分した絵画運動にロマン主義があります。それは古典主義の規範と形式美に反抗して、個性を尊重し、感情の表出を強調、自由を求め、想像を重んじ、無限なものにあこがれました。奔放な色彩、流動的な筆致、動感に満ちた構図などが特徴です。この派を代表する画家としてドラクロワの名が挙げられます。

レアリスム＋バルビゾン派

パリの画壇が古典派とロマン派の対立で沸き返っている時、パリ近郊のバルビゾン村では自然の穏やかな風景や農民の日常生活を描く画家達が訪れたり、定住したりしました。これら一群の画家達をバルビゾン派と称しています。科学の飛躍的進歩、実証主義的精神や近代市民社会の成立における個人主義の確立などが、現実の周辺の風景や素朴な生活に関心を向けさせる要因となったと言えます。日常の生活を描くことの意味が改めて認識尊重されました。この画家群には、ミレー、コロー、デュプレ、トロワイヨン、ジャッ

企画展

第九回 千葉県移動美術館

現在、本館には日本画・洋画・彫刻・工芸・書・版画の各分野の作品が収蔵されている。これらの作品は、常設収蔵作品展等において定期的に展示替えをしながら年間を通じて紹介している。さらに本館では収蔵作品の鑑賞の機会を広く県民に拡大し、地域文化の振興に寄与するため、県内二ヶ所の会場で美術展覧会を行っている。作品は本県にゆかりのある作家を中心に毎年30～50点を展観しており、今回の会場及び会期については、次の通りである。

八千代市文化センター・ホール　9月11日～23日
君津市役所5階大ホール　9月26日～10月15日

この機会にできるだけ多くの方々に心ゆくまで美術の世界に触れていただければ幸いである。

ク等がいます。またレアリスムを唱え、撤底した現実直視を行った画家にクールベがいます。理想美、あるいは空想や文芸的要素を排し、眼に映るありのままの姿を描き出しました。またドーミエは、社会諷刺の漫画や、下層市民の生活を題材に油彩画や水彩画を描き、特異な才能を発揮しています。

印象派

写実をさらに撤底させ、光というものに重点を置き、物の個有色を否定、自然を色彩現象として把握し、瞬間ごとに移りゆく色の微妙なニュアンスを画面に具現したのが印象派の画家達です。モネ、シスレー等は、輝く光の効果を損わない方法として、パレット上の混色を避けたり、あるいは違った原色を直接キャンバスに並置したり、厚塗り、盛り上げを行うなど、混合して濁った絵具では決して表わすことのできない輝きと明るさを画面にもたらしました。その追求の結果、描かれた絵画は次第に写実絵画の枠から離れ、それは、以後の自然の再現とは無縁の絵画を形成していく契機となりました。

ローランサン「ヴァランチーヌ」

後期印象派

印象派以後の新段階として位置づけられる後期印象派については、その主要な画家として、セザンヌ、ゴーギャン、ゴッホ等が挙げられます。いずれも印象派の感覚にたよる描法に対して疑問を抱いた人々であり、画風がより構成的、造形的となっていきます。セザンヌは物の実在感を求め、画面の堅牢な構成につとめました。またゴーギャンの色面構成、あるいはゴッホの烈しい筆触、まばゆい色彩による内面の表出は、印象派と異なる様式と言えます。さらにまた、印象派の色彩理論を科学的に追求し、細かな点描の方法を用いて画面構成を行ったスーラ、シニャック等の新印象派の画家達の仕事も特筆されましょう。

象徴派＋ナビ派

官学派の客観描写、印象派の視覚偏重に反抗し、また物質主義から離れて、精神的、神秘的な世界に目を向けた象徴派と呼ばれる画家達がいます。外観の描写より、想像力を自由に働かせて、主に物語の主題を借りながら、その奥にある人間の魂の神秘を表わしました。モロー、ルドンはその特徴が顕著です。ボナール、ドニ等のナビ派の画家達も、ゴーギャンやルドンの影響を受けて、装飾性や象徴性に富んだ作品を創造しました。

フォーヴィスム（野獣派）

印象派以後、絵画は自然主義的な描写から離れていきますが、特にマチスを中心とするフォーヴィスムは色彩を再現的な役割から解放し、色彩自体の表現を強調、またフォルムを単純化し、色と形による造形秩序をうちたてました。マチスのほか、ルオー、ヴラマンク、デュフィ等も色彩の持てる表現力を最大限に駆使して特色ある画面を構成しています。

キュービスム（立体派）

フォーヴィスムの画家達が色彩の世界を追求したのに対し、ピカソを中心とするキュービスムの画家達はフォルムの追求を行い、理知的な画面構成を形成しました。レジェやドローネー等もこの美学を展開させていった画家達でした。

エコール・ド・パリ

二十世紀初頭にパリに各国から多くの画家達が集まりました。これらの画家達を総称してエコール・ド・パリと言います。この派には共通した主義主張は無く、各人がそれぞれ独自の様式を創造しました。これらの画家達にはモジリアニ、スーチン、藤田嗣治等がいます。

以上のようにフランス近代絵画の展開を体系的にとらえ、油彩画を中心に代表的画家約六十名百点の作品を紹介します。今回の展示を通して現代美術隆盛の基盤を築いたこれら画家達の遺業に多くの方々が触れていただくことを望みます。

●美術講演会

日時　九月一日(日)午後二時
演題　「ロココからエコール・ド・パリまで」
講師　松沢茂雄（洋画家）

●第二回美術を語る会

日時　九月十四日(土)午後二時
話題　「印象派の画家たち」
話題提供者　花香利治（洋画家）

ゴヤ連作全版画展

―美術ファンを魅了―

5月17日から6月16日まで開かれた本展は、日本で初めて、ゴヤの四大銅版画シリーズを一堂に展覧したものとして、連日熱心なファンがつめかけ、真剣な表情で作品に見いる姿が多くみられた。また会場に、県内の版画家坂戸武雄氏のご好意により銅版画の道具を展示、ゴヤ版画観賞の一助とした。

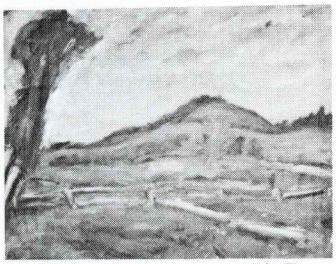
会期中、美術講演会（5／26）と美術を語る会（6／8）が開催された。講演会講師牛玖健治氏の版画家らしい視点でのユーモアあるゴヤの作品批評に、出席者は改めて会場で作品を見直し、印象を新たにしていた。美術を語る会では同じく版画家の鶴岡洋氏が図をまじえてゴヤの人間関係をわかりやすく解説し、また氏の作品と原版を実際に示して技法を説明、出席者に好評であった。

企画展 今関啓司展—房総の美術家シリーズ⑮

85・9・19(木)～10・13(日)

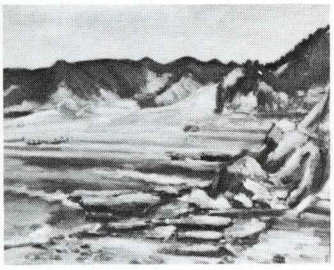
房総の美術家シリーズは、房総に生まれあるいは定住して近代日本の美術界において活躍し、美術振興のために貢献してきた美術家たちの再発見と顕彰をめざすものです。昭和四十九年十月に開館し、最初の企画展「近代房総の美術家たち」（同年十二月開催）にはじまる本シリーズも今回で十五回目となりました。

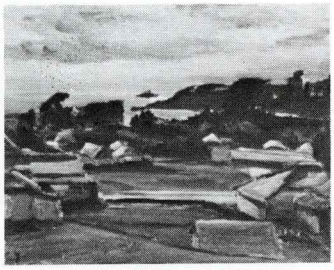
大正・昭和の洋画壇で活躍した長生郡長南町出身の洋画家今関啓司（一八九三～一九四六）に焦点をあてて開催します。


「牧　場」　大正４年頃

今関啓司の郷里、長南町は房総丘陵の山間部にあり、農林業を中心とする静かな町です。美術の面では、この町から日本画の高森碎巖（一八四七～一九一七）と今関啓司を生んだ町です。千葉方面から県道長柄・大多喜線に入ってすぐ長南町長南の街並に入ります。長南二五六四番地の道路に面して高七三センチメートルの黒御影石の碑がひっそりと立っています。正面に「画家今関啓司生誕の地」と楷書で縦に陰刻されています。昭和五七年三月に長南町教育委員会により建立されたことが裏面の朱文字でわかります。

今関啓司は、今関広吉・よしの長男（四人兄弟）として生まれ、十三歳で上京。初めは商業の見習いをしていたようですが、中途で洋画を独学で学んだ様子です。大正三年（今関二十歳頃）日本美術院が再興、研究所内に洋画部が設けられ、洋画部同人は小杉未醒で大観と結んで東洋的精神的なものを標榜していました。今関はこの頃に日本美術院に学び、やがて院展洋画部に所属する。大正三年の第一回院展には洋画は小杉未醒一人だけでした。今関は翌年の第二回院展から作品の発表を始めます。この時一緒に出品したのは、未醒をはじめ小出楢重、長谷川昇、倉田白羊、村山槐多等です。このころの出品者をみると二科展と院展の両方に出品していた作家の少なくなかったことがわかります。


「山 海 春」(鵜原)　昭和９年

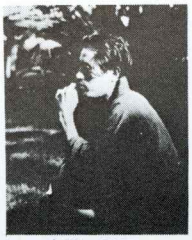

「伊豆の春」(白瀬)　昭和12年

大正七年未醒らが院展を連袂脱退、院展洋画部は消滅しました。草土社の作家たちや梅原龍三郎らと大正十一年春陽会が結成され今関は、岸田劉生、万鉄五郎らとともに客員に迎えられ創立に参加しました。大正十三年客員制廃止に伴い会員となり昭和二十一年疎開先の茂原市で病没するまで終生春陽会を主舞台として活躍しました。昭和十三年春陽会の文展参加以後は文展無鑑査でした。今関啓司は写実主義の画家で、特に風景画にすぐれ、鋭い描写力で知られた非凡で異色の画家でした。素描、油彩をはじめ水墨画の作品もよく制作しました。

お墓は生家に近い大林禅寺にあり、戒名は、藝林院啓暁無有居士。

「浅春山路」　昭和18年

今関啓司の生家の奥座敷は、当時のままに保存されている。部屋に一面の扁額があり「短路ノ一踊」と伸びのびと書いてある。左隅に小さく「一九二〇、春／啓司」あるので二十七歳だと判る。恐らくこの当時、長生村一松の入山津海岸の網納屋の一部に妻の兄で同じ春陽会の山崎省三（自由学園の教授）と住んでおり、一松小学校の県下では先駆的な自由教育にかかわっていたはずである。一松小の教職員と山本鼎らと一緒の写真も残っている。昭和十五年文部省の依頼で国定教科書「カズノホン」の挿絵の作者として近年注目を集めるようになった。紀田順一郎著『最初の一冊』でやっとみつけた「幻の画家」として紹介。今関五十三歳の短路。彼は、踊って絵を描いてさわやかに生きた。


今関　啓司
(1893～1946)

昭和60年度 常設 収蔵作品展Ⅱ期

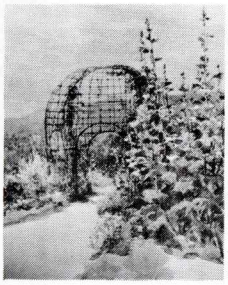
9/21～10/13

本館は、千葉県ゆかりの洋画家浅井忠を核として近代水彩画史における代表的作家の作品の収集をすすめている。

今年度第Ⅱ期は、「水彩画の世界」をテーマとして本館収蔵作品を展示、私達に親しみのある水彩画の魅力を充分に味わっていただくとともに、日本近代洋画史上、重要な位置を占める水彩画の流れを見直していただく機会とした。

○展示作家の紹介

幕末、ワーグマンに伝えられた水彩画は、明治九年開設された工部美術学校においてフォンタネージにより本格的に教授された。**浅井忠**（一八五六～一九〇七）は、バルビゾン派の流れをくむイタリア人風景画家フォンタネージの最も良い感化を受けたといわれ、軽妙な筆致で抒情的な水彩画を多く残した。



浅井忠「京都高等工芸学校の庭」

浅井は晩年、京都高等工芸学校教授に就任、また聖護院洋画研究所（のち関西美術院）を創設して優れた洋画家を育てた。なかでも水彩画家として浅井の画風をよく受け継いでいるといわれるのが、関西美術院の**加藤源之助**（一八八〇～一九四六）と京都高等工芸学校の**長谷川良雄**（一八八四～一九四二）である。浅井の門下で最も古い**中林儁**（一八七六～一九三七）は、日本水彩画会の設立にも参加している。**田中善之助**（一八八九～一九四六）は、聖護院で学び、渡欧後は関西美術院教授となった。浅井とともに京都高等工芸学校助教授として指導にあたった**牧野克次**（一八六四～一九四二）は、のちニューヨークの美術学校の水彩画教授に招かれた。

明治後半、アルフレッド・イーストらイギリス人水彩画家が相継いで来日したが、その作品の芸術性の高さと優れた自然描写に刺激され、**三宅克己**（一八七四～一九五六）や**大下藤次郎**（一八七〇～一九一二）ら水彩画を専門とする画家が現われた。大下の「水彩画の栞」や三宅の「水彩画の手引き」の刊行、「みづゑ」の創刊、さらに三宅と鹿子木孟郎の水彩画専門画家の是非論争などが水彩画に対する一般の関心を高め、当時の白馬会浪漫主義の浸透や絵葉書の流行とあいまって水彩画全盛時代を生みだした。

三宅克己「小諸城址」

一方、大下は水彩画の普及につとめ、春鳥会、水彩講習所、そして水彩画会研究所の創立と活躍した。

大下の急逝ののち、大正二年、**石井柏亭**（一八八二～一九五八）、**白滝幾之助**（一八七三～一九六〇）、**赤城泰舒**（一八八九～一九五五）らが発起人となり、日本水彩画会が創立され、のち古賀春江、万鉄五郎、**不破章**（一九〇一～一九七九）**中西利雄**（一九〇〇～一九四八）らが加わった。なかでも浅井忠に師事した石井柏亭は、再開された研究所の主任として指導にあたるなど活躍、その平明な表現と確かな素描力で大正期の水彩画をリードした。

中西利雄「人物」

昭和期に不透明水彩が流行し、マンネリズムに陥っていた水彩画界に決定的な変化をもたらしたが、そこで大きな役割を果たしたのが中西利雄である。中西は油彩に劣らない力強い表現をめざし近代感覚あふれる作品を発表した。昭和十五年、**荒谷直之介**（一九〇三～）、**小堀進**（一九〇四～一九七五）、春日部たすくらにより日本水彩連盟が結成された。小堀は新しい水彩画をめざす若手画家たちの中心的存在となり、水彩画家として初めて日本芸術院会員に選ばれた。荒谷直之介、**三橋兄弟治**（一九二一～）は現在も水彩連盟で活躍している。荒谷は一水会常任委員、日展参与もつとめ水彩画界の重要な地位にいる。三橋は水彩連盟委員をつとめ、独自の渇筆描法による点描風の作品を発表している。

ごあんない・団体展

●日本レリーフ協会展
7月9日～7月21日

●第55回習美会初夏展
7月16日～7月21日

●第5回日本春秋書院千葉県書道連盟展
7月16日～7月21日

●第17回千葉市水墨画同好会連合会展
7月23日～8月4日

●中央美術協会千葉支部展
7月30日～8月4日

●第14回写真千葉県展
8月6日～8月18日

●第5回千葉サンケイ現代洋画展
8月6日～8月18日

●第13回千葉市教職員美術展
8月20日～8月25日

●第9回尽墨会書作展
8月20日～8月25日

●第18回千葉県高校合同写真展
8月20日～8月25日

●静稚書道会小中学部千葉地区展
8月27日～9月1日

●第6回龍峡書道会千葉県人展
8月27日～9月1日

●刻字千葉展
8月27日～9月1日

●第15回いてふ会彫刻展
8月27日～9月1日

●第25回白扇書道会展覧会
9月3日～9月8日

かたる・つくる（美術を語る会・実技講座等）

◆書芸研修講座（1）
期日　8月27・28日〈2日間〉
講師　種谷扇舟氏
定員　20名
申込締切　8月13日

◆彫塑入門講座
期日　9月3～6日
10～12日〈7日間〉
講師　久保浩氏
定員　20名
申込締切　8月19日

◆洋画研修講座（2）
期日　9月14・15・21
22日〈4日間〉
講師　高橋規矩治郎氏
定員　30名
申込締切　8月31日

◆デッサン入門講座（3）
期日　9月18・19日
〈2日間〉
講師　五十嵐光昭氏
定員　30名
申込締切　9月4日

◆陶芸研修講座
期日　9月25・26日
10月22・29・30・
11月19日
〈6日間〉
講師　神谷紀雄氏
定員　20名
申込締切　9月11日

◆洋画研修講座（3）
期日　10月26・27日
11月2・3日
〈4日間〉
講師　天野三郎氏
定員　30名
申込締切　10月12日

◆洋画入門講座（3）
期日　11月6・7・13・
14・21・22日
〈6日間〉
講師　渡辺晋氏
定員　30名
申込締切　10月23日

◆七宝焼入門講座
期日　11月末〈2日間〉
講師　長南光男氏
定員　30名
申込締切　11月10日

◆日本画研修講座
期日　11月30日・12月
1・7・8・13
14・15日
〈7日間〉
講師　松原道男氏
定員　25名
申込締切　11月16日

ごあんない・実技講座

〝みる、かたる、つくる〟活動の一環としてこの夏も「美術館夏季大学」を開催する。

今年で九回目を迎えるこの講座は、美術に親しみ、その魅力にふれ、理解を深めることを目的としているが、今回は今年度開催の二つの特別展に関連し、「ヨーロッパの近代及び現代の芸術観について」を大きなテーマとし、各講師の方々にそれぞれの観点から見解を述べていただく。

一、主催　千葉県立美術館
二、後援　千葉県立美術館友の会
三、場所　美術館講堂
四、期日　昭和60年7月26日(金)～27日(土)　午前10時～午後3時
五、受講料　無料
六、内容

◎7月26日(金)〈午前〉

◎「美術館―新しいミュージアムを目ざして」
◇講師◇長谷川栄氏（東京国立博物館展示調整室長兼普及室長）
〈午後〉

◎「形と心―新具象の立場から―」
◇講師◇日野耕之祐氏（サンケイ新聞社美術担当）

◎7月27日(土)〈午前〉

◎「ヨーロッパの造形―具象と抽象―」
◇講師◇三木多聞氏（美術評論家）
〈午後〉

◎「近代絵画におけるフランスと日本」
◇講師◇富山秀男氏（東京国立近代美術館次長）

七、募集人員　二百名
八、申し込み　当日会場受付にて

○講堂わきの情報資料室は、平日12時30分～16時30分まで利用できる。

ごあんない・美術館夏季大学

第一回美術館研究員会議

今年度の美術館研究員10名が委嘱され、第一回会議が7月2日(火)午後2時より開かれた。研究員は美術館の専門的・技術的な事項に関する研究を行うため置かれており、今後の主なテーマは浅井忠「従征画稿」の翻刻、解説をはじめ、これを多面的に分析し、浅井忠資料の整理・活用に努めることとした。

なお、研究員は、池田伊予、石倉総子、加曽利和夫、平戸美和子、佐藤修、高木正、田邊宏、南隆一、村田哲朗、綿貫啓一の各氏である。

日誌抄

5・17　特別展「ゴヤ連作全版画展」（6月16日まで）
5・26　第一回美術講演会（講師牛玖健治氏）
6・8　第一回美術を語る会（講師鶴岡洋氏）
6・16　第一回美術館協議会
6・13～14　関東地区博物館協会研究協議会（鴨川）
7・2　第一回研究員会議